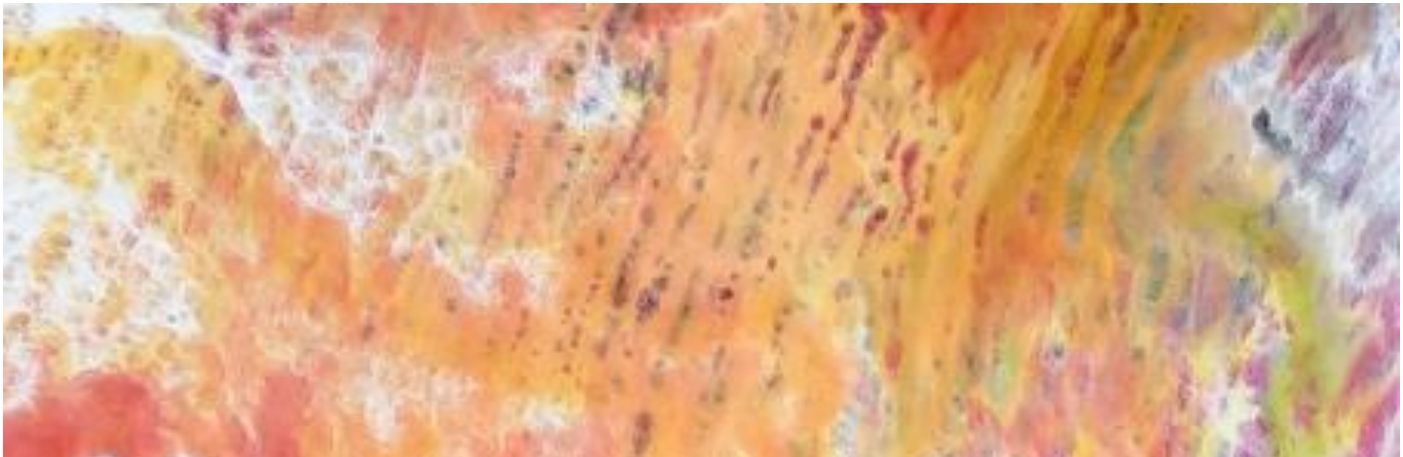
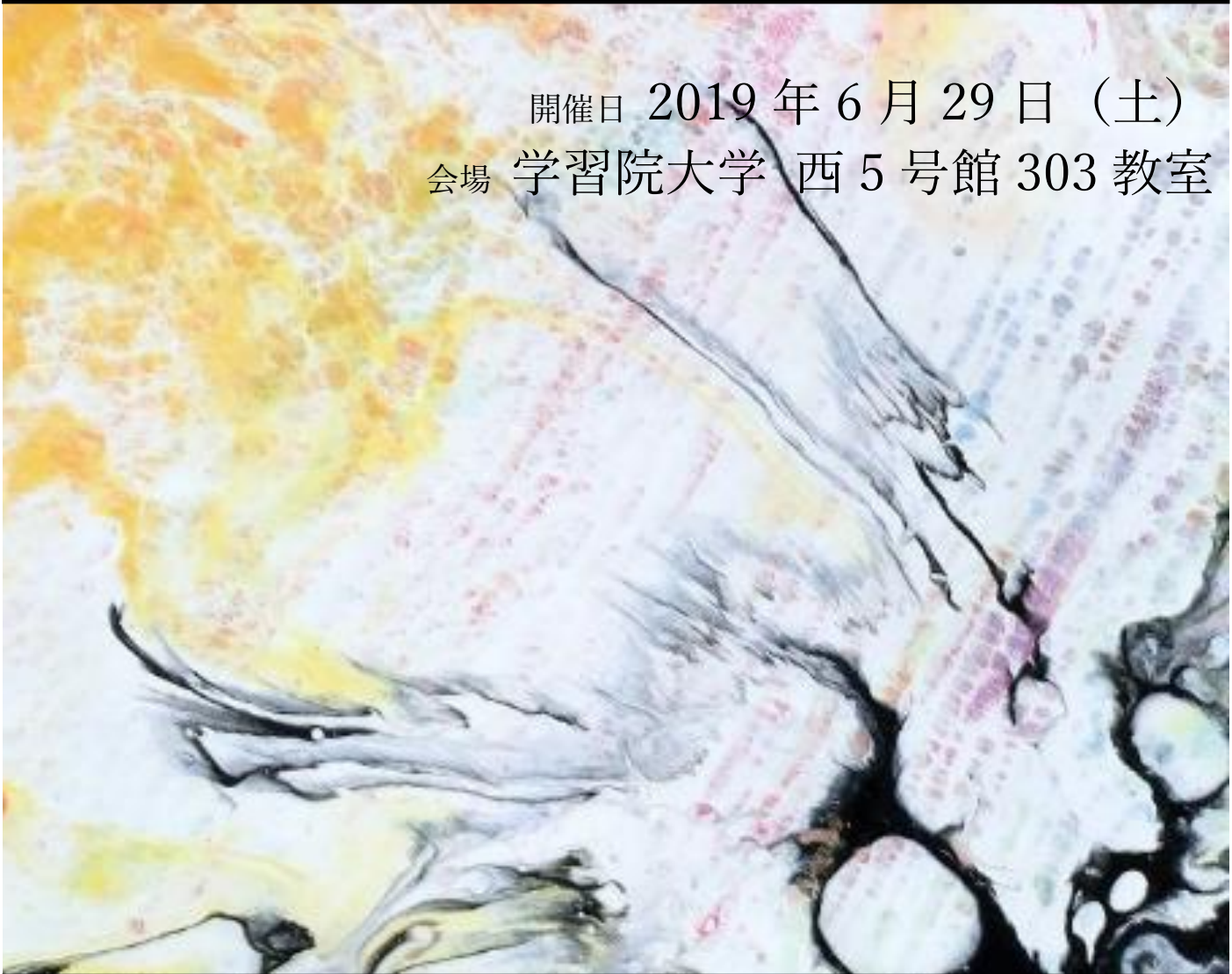




第3回

学習院大学身体表象文化学会大会



開催日 2019年6月29日(土)

会場 学習院大学 西5号館303教室

主催：学習院大学身体表象文化学会 共催：学習院大学文学会

大会プログラム 於：学習院大学西5号館 303教室

12:30-13:30 総会（会員のみ）

14:15-17:00 研究発表（発表：25分 質疑応答：10分）

開会の挨拶 岡村正太郎（学習院大学大学院 人文科学研究科 身体表象文化学専攻 博士後期課程）

研究発表1（14:15-14:50）

炎上するネット上の身体

発表：萩原崇（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程修了）

司会：関根麻里恵（同 身体表象文化学専攻 博士後期課程）

研究発表2（14:55-15:30）

萩尾望都『ポーの一族』における「ムード」の表現

発表：中塚彩（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：吉村麗（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程修了）



15:30-15:45 休憩（15分）

研究発表3（15:45-16:20）

「24年組」という言葉をめぐって

—亜庭じゅん論・序説—

発表：高石凌馬（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：可児洋介（同 身体表象文化学専攻 博士後期課程単位修得退学）

研究発表4（16:25-17:00）

ロラン・バルトにおけるエクリチュール概念の再考

—バルトの水彩画を手掛かりに—

発表：石井咲（同 フランス文学専攻 博士前期課程）

司会：岡村正太郎（同 身体表象文化学専攻 博士後期課程）

開会の挨拶 田原康夫（同 身体表象文化学専攻 博士後期課程）

17:30-19:30 懇親会（会員および同伴者のみ）

会場：学習院大学北2号館10階新中会議室

炎上するネット上の身体

発表者：萩原崇（学習院大学大学院 人文科学研究科 身体表象文化学専攻 博士前期課程修了）

司会：関根麻里恵（同 身体表象文化学専攻 博士後期課程）

本発表では、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（＝SNS）上で起きる「炎上」（個人や企業の失言や不祥事、不適切な内容のコンテンツなどに非難や誹謗中傷が殺到する現象）と身体の関係に着目する。そこで「炎上」しているのは失言——単なる記号としての言葉——ではなく、「ネット上に構築される「身体」——その都度、身体化される言語——であることを明らかにする。研究方法は、具体的事例として炎上した広告を取り上げ、SNSの中でもTwitterを参照し、そこでどのような発言がなされたのか言説研究を行っていく。発表の中ではキリンビバレッジや東急電鉄の広告の炎上した事例を研究し、発信側だけではなく受信側がどのように「炎上」の内容を受け止め、どういった反応をとっているかに注目していく。また、「炎上」を扱った研究はさまざまあるが、それらはあくまでウェブ文化やインターネットトラブルの一事例として言及し、炎上の構造を解析するものであった。「炎上」している最中に起こる現象——受信側の思考——とその影響を受けるメディア側両方を俯瞰していくことで、SNSで身体が燃えるとはどのようなことかを明らかにしていく。

萩尾望都『ポーの一族』における「ムード」の表現

発表：中塚彩（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：吉村麗（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程修了）

少女マンガにとって、「ムード」と呼ばれるものを表現することは重要な要素の一つであると考えられてきた。その一例として、戦後から 1970 年代末までの少女マンガとそれに関わる事象の流れを時系列的に整理した『戦後少女マンガ史』（新評社、1980 年）を取り上げる。著者である米沢嘉博は、時代の流れの中で生じる少女マンガの表現の変化について論じている同書において、全編にわたり「ムード」という言葉を用い、少年マンガなどの表現と対比させている。

本発表は、このような「ムード」の表現に着目して、萩尾望都『ポーの一族』（1972-）における画面構成を分析することを目的とする。『ポーの一族』は、既に少女マンガの様式について論じようと試みる先行研究の中で取り上げられてきており、言葉やコマの重層性が指摘されてきた。発表では、これまで「ムード」という曖昧な言葉でまとめられてきた表現に着目し、画面に「ムード」を生み出すと考えられる装飾的な表現から、作品全体の構造についての考察を進める。発表を通して、萩尾が『ポーの一族』で描いた線の特徴を明らかにするとともに、ふわふわと掴みどころのなかった少女マンガの「ムード」の表現について再考するきっかけになればと考えている。

「24 年組」という言葉をめぐって

—亜庭じゅん論・序説—

発表：高石凌馬（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：可児洋介（同 身体表象文化学専攻 博士後期課程単位修得退学）

「（花の）24 年組」という言葉は、昭和 24 年前後に生まれた少女マンガ家のうちの一部を指す呼称として知られる。初出については諸説あるが、この用語は遅くとも 1970 年代半ばまでには少数の作家やその関係者のあいだで限定的に流通していたものと考えられる。1978 年 12 月には「迷宮」同人が『漫画新批評大系』（第 2 期 4 号）で「総括・花の 24 年組」特集を組んでおり、先行研究の整理によれば、これをきっかけに「24 年組」という語はマンガ・ファンダムのあいだでひろく定着していくことになったという。しかし、この見立てを全面的に採用するかぎり、「24 年組」特集の冒頭を飾る亜庭じゅんの文章が「“24 年組”なるマスコミ用語を、ここではとらない」という宣言ではじめられていたことの意味をつかみそこねてしまうのではないか。本発表では、1970 年代半ばから 1980 年代初頭にかけての活字資料を調査し、ここでいわれている「マスコミ」がおそらく『朝日新聞』を指す表現であることを確認したうえで、その効力や射程を含め、言葉を扱うことにどこまでも意識的でありつづけた批評家・亜庭じゅんの仕事に光を当てる。

ロラン・バルトにおけるエクリチュール概念の再考

ーバルトの水彩画を手掛かりにー

発表：石井咲（同 フランス文学専攻 博士前期課程）

司会：岡村正太郎（同 身体表象文化学専攻 博士後期課程）

フランスの批評家ロラン・バルト（Roland Barthes, 1915-1980）が概念化した「エクリチュール」には、（1）文字、（2）筆跡、（3）記述行為の3つの意味があるとされている。なかでもバルトは、「第3の意味」である記述行為としてのエクリチュールを重視し、批評活動を行なった。従来の研究は、バルトのエクリチュール概念を彼の構造主義的な批評活動に結びつけ、記号論的な観点から捉えてきたが、これをバルトのエクリチュールに関するすべてのテキストに適用することは難しい。なぜなら、バルトは、1960年代後半から1970年代前半にかけて、エクリチュールを手や筋肉の動きといった書き手の「身振り」に関連づけて言及するようになり、これによって新たな観点が加わったからである。バルトがこの着想にいたった経緯を考える上で無視できないのは、1971年から絵を描きはじめ、多くの水彩画を残したことだ。本発表では、「絵を描くバルト」を分析の主軸とし、バルトの水彩画、および1970年代のテキストを手掛かりとすることで、バルトのいう「エクリチュールの身体性」を考えたい。